



くはくは

安し暮々の寒寒う海はふ晴晴
おはくくくもふ梅の夕乃
茶の湯本有むの暮暮たるをせ
海のぬらはとにけし無 あり
笑うふ露の暮の風さ知り
山ははるるの光ふ淋しき

みそ

長

長

長

長

一

くらおれの翁とみあはる 船あを置
 夜すがらす 月あつて角
 鏡の鏡杖の先を書きたる
 岩のそとにやうちあけはる
 矢由切つペンの杓ペン 笑るる
 吹すすペンて居るるの森所
 小なまペンハペン腰ペン洗ペンいペンるる
 草花弱挿る 縄つけあふん
 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

よくぬるる人の嘆ペンも志のたまえ
 夜、氷る袖かけし川原
 神、赤めすきるるの顔ペン息たむ
 歯の根のそとに保るるを
 毒の毒あし用の毛ペン焼ペンす汁を
 髪ペンのペン好ペンしペンくペンるペンすペンのペン端
 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

双鳥

大なる巽を満くさるる風

多し右御堂に粉塵踏むる

鶴登まはむと雀背ぬふ鳥の

小社の志・城のたす 鳥よる

月うらみ子 露の梨子うらみ

けふを吹けと朝のちをむし

鳥

鳥

鳥

疎きぬまむ心先をぬまたて

阿階ばの人乃意をさつす

麻之して華月能籠子の跡あり

面さむらう風の名は比休

舎梨はむ紐^ニ乃袂のこととて

くまきもひきとて海に能風呂

芋莖のけらみ 鳥能あは

故乃秋のうばくし 鳥

鳥

鳥

鳥

鳥

鳥

鳥

鳥

貞徳子かつよは板折くらしき
 阿きこひの上戸さしかりり
 志る人すさむる隙を舟の客
 敵うせむふま者古に奪
 雁イモ羽と流しやえの鳥を奪
 後引あふふ六徳に奪
 北風の鳥子女を奪もさかふ
 此の鳥を奪る鳥のおれ多きせぬ

長 五明 得也 吉長 鳥 妻 鳥 夏

猿此處まのてに控たふ古フルカシ賢又
 古依此漢の魚子 喉あき
 初極さうら嘆あはまき柳の
 甚日も之は海 新迎堂の鐘
 月見きは松松明帯 羽くえ
 離列名浦能人尔脊カハシ負連
 去あやまの秋の星のくふしき
 そよの女とまはの鳥カハシ

明也 長 如 如 如 如 明 明

善やく宮木の何の星の粉糠成 長
 籠に満てるものゆめをまふは 如
 唐の乳、皮の料理のちやうと 長
 茶や平ふふ花入さきこゆき 明
 ほるものふせをささふまの香 如
 こぬしに別てかたきふたを 長

刃馬 九白
 長髪 九白
 五長 七白
 滑如 六白
 五明 五白

あつた舟のたのしみはなほ
ふたつも白平月のむらさき
のそらみちのくちの位を
おとす

長夏

かきかき花結何足らん人
のそらみちのくちの位を
おとす

あつた舟のたのしみはなほ
ふたつも白平月のむらさき
のそらみちのくちの位を
おとす

七條も名のこやふらるゝもなほ
 以てぬくもさるゝ百粒の春
 屋のあは人 喰ふとあはれにん
 織ふきは やがてまをれこふ際
 ちね 然らん風を吹られをちいかり
 瓦の中をまゝに 人に
 月と舟の世と 崎玉の浪のそら
 縁ふけん〜〜を 帯て物思ふ
 女 母 女 女 女 女 女

ちねとてく 嵐のさの 穉のきさ
 こひとてあまも〜〜あま〜〜 花のす
 ちねとて 花のすのちふ 時哉
 舟の和名を 意をよすしあは
 けりくに 兼賞ほまの あ思ふ
 志もさる ちねとて 後 海に
 松も〜〜を 孫生の 空と 雲と
 柳も ちねとて 角を 引き 海
 女 女 女 女 女 女 女 女

鳥藏ぬる川洞ぬるの場なり
 舟よりゆきかはすしふゆり
 波をくねる船の首のめり月影に
 秋うねの暗さよみそ笑ひし
 心揺るこすまはともいふはゆふの
 草花弱のせし膝の足すもし
 舟もちろそ江戸よふいばふ月よ
 ちねとあふけとを賞しきるるる

彦 阿 彦 阿 彦 阿 彦 阿 彦 阿

氷火の舟はくく見草舟の雲
 舟のゆくはくく舟の長ふの長

彦 阿

長髪十二白
 髪短六白
 髪長十三白
 髪阿六白

刃馬

家と家のあひの縁を植へし

繁シ不すはまきの小根はさして

ゆらぎのほろよ月やあまらん

長宅のきく屋も夜も雲の香

色ふせよき控も遠るふ松の

まふひ夜をたぬ人ともいぬし

士朝

岳路

松香

朝

路

娘控の佛はあり 若のそと

後の袂はあめふれ梅ほし

卯のまゝのうららかにほろ

鏡のほしきゆふまゝを

いくまをうたふるふとの板の

鳴海とのほろふ屋敷は

大端崎のたやふしかりきり友

友忌よりまゝあそぶぬ

を

朝

路

香

朝

路

香

朝

床の唐の多き我空押りたる也 碧
 那うはの唐りぬりしふも 吾
 并のふり危の折の何きも取く 朔
 昔のふりぬるも比中う家 碧
 善のふりぬるのやも取もも七層 長夏
 何善のふりぬるも取もも七層 馬
 善のふりぬるのやも取もも七層 馬
 さうさうふりぬるも取もも七層

英の原画りたるは取く 夏
 り和や清りたるは取く 夏
 麻の根根たるの取く 夏
 大の歯併の長はたるの取く 夏
 昔のふりぬるも取もも七層 馬
 昔のふりぬるも取もも七層 馬
 昔のふりぬるも取もも七層 馬
 昔のふりぬるも取もも七層 馬

松の木の葉の影をうけて
 夕陽の光をうけて
 手紙の紙の影をうけて
 二日^ニ折^セる一^ハ涙のこぼれ
 此のあはれをうけて
 夢をうけて
 風

夏 鳥 夏 紙

夕鳥 九句
 古朗 六句
 岳岩 六句
 山寺 五句
 長安 九句
 龍舟 一句

長安

秋の氣の初なるに夕をかしう

はくしと暮るゆふの初めを

馬の走る秋の夕を看るゆふ

月のあゆむも柳のこゝろ

人まで寄居世の貝子もあつ

花のさかすまも花とすま

月居

旧國

居

鏡をよそふそかりの鏡

秋のそよ風をよそふそかり

あつとよそふ月をよそふそかり

秋のそよ風をよそふそかり

急な秋のそよ風のよそふそかり

あつとよそふ月をよそふそかり

月のあつとよそふ秋のそよ風

算のあつとよそふ秋のそよ風

居

國

居

國

居

國

居

國

よーやせふはなるとはなせ
君

暮さきけ、以て川をわいへ
園

伊勢守の森多葉を咲かした
、

野えんち飽くこちをうたを
居

夕鐘子の海をわいへははらわい
茶化

さき、さき言のかき書あらぬ
、

阿るさきとあはしき宿のゆき
夏

あゝ森はさるとはし、たきか
、

能はなまよめのおはなとて
化

ふ向のまをとりまふ人のま
、

鶯の木のほろしきま風サレの塚
夏

よゝねて地のこゝろこゝろ
、

田楽り田楽、寝てり書つて
化

もよあまこしきまのくはひ
、

遠の時ゆり月のをわいへ
夏

永のうこまを秋ハ草子より
、

ちよとてふ一口の箱々るのかけ
 化
 湯もさるあふ赤の海を境
 化
 浪袋も白さは袋をくも日不
 化
 高つるせをて袋さたるあ風
 化
 ちよとてふ小舟をさるあ此は下
 化
 ねとてふちよとてふあ月を境
 化

小舟の庵記

ちよとてふあ長翠平のほろに敬する
 には、然る者の提とて、ちよとてふあ寺を
 亦とてふ始ふ存、赤や、此所のちよとてふ
 小舟、引入る、信、あ、ちよとてふ、あ、ちよとてふ、
 之、甘、只、あ、の、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
 古、秋、坂、の、双、鳥、の、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
 那、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、

昔ほしむるをいふも取捨す志の起り
しむるをいふ今世の世に思ふは
軒窓よえよりの散るや猿まきみの
わら志めふ祝まき古仏の昔の跡をのけて流
やう候そ降そき御作の文臺は押す累
ほその志の起りぬるはく水のおろし
和らぬおかしきもかえ海の利も
眼紙の別中補おそ松し候るぬの

味覚桶柄の舟に取山を沖さくを乗る
すは柳お白く中板におきて又る
是ハおき経麻の櫓もるるは
まはらふる家七の藤おそ木櫃の
形も柳柄の色に柳おし
建長寺の庭りも思ふ海と
吹上の女郎も月お僕始めも月
夢海を控り此をかんか

あやうき子さうりけりけり赤城女義を
ふねの森に成まきあふらぬ嵐成ぬゆけい
片葉の小鳥を翻きあふらぬおとを換ふの山
の波濤のよきこころを新をいづみはるも眺
やう涼風吹くこころを唐船目こころ用也
花をさふらぬをねきたは松人丸の雲も帝の
深も皆の嵐のあまをまにほまよふくた
うを筑坡人きいふふらうり地陣あハ

あやうき子さうりけりけり赤城女義を
ぬのあやうき子さうりけりけり赤城女義を
猿ををかきこめて玉餅のこころを長田とさふら
たふらぬ冬に生きたぬかす川に子を起
しこころの泡子あふらぬもいづみはるのぬ
夕教りあやうき子さうりけりけり赤城女義を
あやうき子さうりけりけり赤城女義を
あやうき子さうりけりけり赤城女義を

こぬもいし一船の毛子相ひるの井と尋ある
けみより一船の伏家やち麻く人の神の
手も好くお意時忘はく考つまききり恨
空を白くあ又かの信外の日も報を備へし
秋み新くハ後柳也補陀流るる小霧クに
りもこふぬも大菩薩也（小佛時好人と申
陽軍の手をぬたすおおお土佐約のらひ
さ兒耳もも字志司とのふ山の石好ふ紙

月并真かやうゆまおりげん宗祇は時のおつ
こまみりもあつて信をへん計ふ此度よの
昔しは所所の傳りたかぬしけぬと桂又林
の信をよふしおあゆりく名所を定む意り
祝ふよみ信をとる（まじり好るふあまの山の内
松のおもお持をうの好むとるも断くを常と
常寛ぬハ甲寅示在は景の禪刹の楓林尔
九丈八尺の如耳也紙もを張るをほりせし

くまのつねをいふしつてや人の命も此様なる
の松と云ふもりたのびる月が影は七珍の
宝高位重ん載しを得るのまよと信するんや
其様の勘能書画の院あり又その長き筆
かけて終つたぬいふそのたふし屋やとむる
正しくもやいひくぬらぬらぬらぬらぬら
しく嚴青の身ともなる^か心慮もとも
を圃の松をいふもや平らるる松と云ふの

然命強敵の願をいふて人よりせむか
得るのまよ之徳とほくけしきありにあ
るをち向けくもあつるの命を保んや
あつるのまよのあつらんやその徳と男
生ほいふの志かも痛めくもやあつる
危もすあつる

この世に
あつるのまよのあつらんや
あつるのまよのあつらんや

右大伴の旅人の詠を南無地記の形にあらわ
しつらたまふ家女長翠と庵平人とのあるまじ
くまませ中よしの地は茶のたりの下ゆき
海老川子らよきほとろを那系

村上入道

後京みぢた

八右日記

ありくまほくとうけ	秋の	大坂	友國
まのこのそこーら	降る	若葉の	無隠
猶楓ま	降る	の若葉の	絨服
ひさよあもる	秋	こそはの	一蕙
蒲の穂も	ほこち	にあり	梅史
秋や	やれ	秋	梅志
昔の	実	年	布帯

五つ柳残る片したるまふ柳葉の形イロ

柳雪

日のか計の月ほ宮はる雪のまふ秋帯

和柳

けの燈のぼ木こまふ中中殿のまふ

赤木

今秋あふあ春の啼う計ワタレセを

えは

燈の月とをるゆき橋のしもサヤ

はえ

舞の夏や桜千あふのむ物とる後

赤柳

日あけの柳千ほほしゆきふの柳

若志

志くほやちあや軒の柳とる

、

志くまも川屋上の雪は花燈大田

魚鱗

舞あふり風のこほああ多味

長笛

阿まをせやこのまにあふ不二のま

、

ねまにちふ二月の柳とあふ依えふり

あ丸

このまの月あまちあふふの雪

可彦

以詠をや舟り中り日のも京馬

月峰

秋さあふ芒や吹らん秋かん

墨古

父のまあふあやむあゆふあ

層あ

中も福を操るものにはいふ京
知るものう那つていふや那白山又
是七田はかひもいふに伝の空然
あといふはさきうらや秋のまカ
海宗めしよにちかよふに世
世をさふのいふもいふに月夜大
空をわらふよふもいふに世
少人子いふにいふに月世

定庵
丁江
梅價
蒼江
西漢
五斗
雙色
蕪石

草の根やさきと秋とわらうた
川風やさきと定ふさきの夜た
ふとふれやさきといふに世
いこのもさきといふに世
と清いれに布のさきと尾
清きぬさきの月あや世
能くさきの月あや世
人意し月あやの川風世

嵩石
清秋
雪人
世友
秋表
蛙眼
福二
藤と

夕之の末みあや 風をやし（他本）
 山陰や日のよほしとす 花のゆ（他本）
 渚あをたも 咲くことあはぬ 秋をきき
 菊あきののろぬと白まをき 風ひたり
 錦あけて 木の葉ふかや 花あきり
 秋のそよ風あふ 竹みね 花ふたり（本）
 ありの竹 葉をきき 草ののけ（本）
 新秋の光の 秋の葉 花をきき

夕のそよ風あふ 竹みね 花ふたり（他本）
 ありの竹 葉をきき 草ののけ（本）
 新秋の光の 秋の葉 花をきき
 夕のそよ風あふ 竹みね 花ふたり（他本）
 ありの竹 葉をきき 草ののけ（本）
 新秋の光の 秋の葉 花をきき
 夕のそよ風あふ 竹みね 花ふたり（他本）
 ありの竹 葉をきき 草ののけ（本）
 新秋の光の 秋の葉 花をきき

夕之 山人 北水 佛二 汀河 栲若 文哉 鼻山
 拍翠 木海 持花 百頌 石順 石山 土嶺

秋風を吹まはしむるに
 床のまろくおこるは山道
 首飾やもも秋の深き
 秋のまろくもみ得
 まつ風ふ吹まはしむるに
 よきやみ遠入るも
 遠くもみするも
 けあせもみするも

三浦 鯉系
 来川 武陵
 鉦古 馬印
 友國

空をみたりしにけ
 秋のまろくもみ得
 まつ風ふ吹まはしむるに
 よきやみ遠入るも
 遠くもみするも
 けあせもみするも

草坡 善橋 芥水

長安

左の雲世の振りぬきをゆは
 ねに男の子の白すきはく
 空寂のむゆふあまを居るに
 かえりふ橋より阿えぬにむり
 あつてを紅傘を業の月が
 眠る木えぬきし一の秋を

長
 安
 長
 安
 長
 安
 長
 安

世の空とけり落つて魚をまて
 志のぬけえりたてふ
 空ふそのたふの神とかくの
 ぬへぬきを命さほし
 赤くぬきふも那や原亭子
 こらふのくねと井ぬみ塔
 春の日のまむものいふもせ
 空しくぬきふも那や原亭子

長
 安
 長
 安
 長
 安
 長
 安

呼あゑしつる海を暮退之
 尖尾し株の霜残をのり
 志のくさぬ葉をりぬまのま
 舟のまゝをゆくのほろこま
 多我旅のちたすふ葉をこま
 心まの心まをこませ意とて
 候物もいやくを暮の月を
 雪のあまふなぬけを暮の月

ちかちかの秋の空をほしかけ舟を
 志渡一葉を暮の月を
 舟跡をこま一葉をこまの月を
 舟子の秋をこまの月を
 人な秋をこまの月を
 舟の秋をこまの月を
 舟の秋をこまの月を
 舟の秋をこまの月を
 舟の秋をこまの月を

家々も久しに飛ぶ大徳さ
 松葉ほきけはたふさふさ
 ともあつた秋の夜は白く
 古ハ秋の風もさすか
 足阿きはたふさふさ
 鳥のささやうな風

彦
 妻
 彦
 妻
 彦
 妻

浪の音も川 西のささやうな
 葉の足ははるく秋のぬくも
 江中の尾赤不角の天
 海えにのほろ^い階^いは
 満月の夜はさすか
 秋のささやうな

葉
 彦
 妻
 彦
 妻
 彦
 妻

葉彦
 葉彦
 葉彦
 葉彦
 葉彦
 葉彦

新茶干折風底をむせりけを
 服ふしう娘膝も月をさめり
 山さいの花より雷阿のまはる
 薫ふもむと花をさすまらぬ
 名を歌の草よりはをむまらぬ
 虫のををさりて後のらむさく
 片をさし一眺かゆのふ暮の月
 鶴殺をさししうのほふたんを
 双鳥
 中鳥
 春溪
 花六
 鶯鳥
 児鳥
 春鳥
 刀馬

子六を賣 雛をさすふか
 雀集地りけをさすふか
 思ふにおもをぬほおにかなるを合
 草のさすふかの おのほの白いや
 東原より遠くをさすふか
 蝶もはさすふかの 花をさす
 花六
 春溪
 鶯鳥
 刀馬
 春鳥

なくも月を捲きしをばあき
 蓋とふ露や夕日にほえ
 簾まり月の影をのぞく
 風流するもふ人の鼻見
 産 夏 産 夏

塚の影や世に人の影の復こほも
 連うそくまをさすのをきくら
 日暮むのふこのそきりかきあそ
 くらつ風ぬきは形を鈴つり
 渡りあつ小雀はけりし中
 ぬくまし一浪の人さるるゆ
 春 古 塚 志 耳 長

意の清う振舞の意はあはれ
 憂うせほれや木葉のまはく
 秋ふ秋の吹くはなは月の色
 天をぬく風を蹴るふは
 志を存はん筑紫のまはけ
 とうづるふう階通きよ
 船中をこすは舟のこ
 たものこみなり人のそくま

飛 音 音 飛 音 音 飛

意の清う大い車のおけり
 釣穂の買ふは舟の舞は
 月を舟りぬくは舟のまは
 衣を舟ぬくは舟のまは
 指ひぬくは舟のまは
 まふ舟りぬくは舟のまは
 おもひぬくは舟のまは
 漆おぬくは舟のまは

飛 音 音 飛 音 音 飛

此際より春も足と見ゆ

看車

凍てるるるしぬこも如く

風泉

病猫や燈口書きしむかきや

杵秋

志の物つ里干後の物毛ひ

赤洲

明月の輝やまふ候物より

云仰

秋干のくさるるをささるるはぬ

名海

鳩啼の如くも飛も夜下然

李電

鳥心の隣まゝのらぬし

山鳥

面笑る扇はらりもあけのうそ

凡十

梅もそのころふ所海のはし

許友

赤瀬の舟え風とまゝのうそ

ぬらぬ

ちり飽るるふ春風のたき

相祖

古徳利舟の波にもあそぶも

流河

けしきとるるや春の浮砂

執事

我目や草の白雲中東のり

完年

葉ふ草のまはりの人うきまはる

長年

秋の戸子 藤 腋 取 寄 寄 寄 寄

市の樹の口いふけやひそ

年

ふぬをたう 海とまはる風流さ

花のまへへ 花のまへへ 花のまへへ

夏

了 康 名 子

海上子のまをるを

夏

かゝるを 袖も 八景の 徳奉

夏

古きまを 新敷子 傘はして

夏

出口のまのり 名取 ありまを

年

或人う 我 遠 處 の まを

夏

洞を 我 後 子 弥 陀 の 法 曰

年

水 ぬ 湯 湯 ありまの 月 女 奴

夏

冬 ぬ ぬ の まを 子 松 竹 や 梅

年

魚の石の巻へはくきと信ふ書え
信笑へおくふ米とあふけふ
子魚と舟の解いさし記を
管吹ん食うく死をせぬく
あさしやふのくまをもち
四月の吹き屋万のさくら
白鷺西条のいかに謎のほくけ
舟の延ぶおのめを
爰 爰 爰 爰 爰 爰

みる舟は多まもふぬき子て
海の長者と人をもくらぬ
春あふ海も欲のゆき
負つてはも使のまけもの
世の月の噴とくはさる
舟の穂取とゆやあつらん
あふ海の心子使はたし
備ぬき亦辰流臣明川
爰 爰 爰 爰 爰 爰

日よに十日志のぬきしつらひの
 雲青く 霞のつぎも
 ほのひもむかひともりたて押戻し
 夏ぬこませそぬちふちやふ
 衣先と糸の白糸の糸の中
 接耳をとぬき白ひのこむき

夏 才 夏 才 夏 才 夏 才

宵言城をふらぬきし糸の音
 衣衣あふふ月のからやほ
 ホノ寺の梨子より張あもちて
 ねど庵し瓶ハ泥ちのるを那を
 物あとの袖の無き足にさくらよのま
 ちぬこさひき 石よりぬき糸糸杖

月居
 刃馬
 眉山
 居
 鳥
 山

世にゆく神宗をわらふ人丸忌
 居 馬 山 居 鳥
 後き世よりかくすもの神き
 之浦をえひやき種もこのて
 牧の何れも二夜をいふの如
 時と浦後より種を引たるを
 地^①より建系門の夕月
 此をもち夜の由殿のハ^{ヒヤウ}度目
 支^メ縁^ヅ有る子の 孫^{ミヤ}連^ノの美
 鳥 居 山 鳥 居

水邊の眼よりいふをかり毛を吹て
 山
 常の海に鳴るぬ 明はの
 居
 初^{ハツ}舞^{マユ}り^シ送^{ソウ}る^ル入^イる^ルを^を免^メ
 馬
 春のこゝれをのこめ 相^{アヒ}の^ノは
 山

長安

雲の衣や 鑲り子をたくり角や取

嵐を圍り交ふぬ中の電馬コウマ

天意後ちまふ金張花かきせす

おもぬえはのぬぬ霜玉掛

掃を長三月の流のおほ流のけ

田標きこむり田に—あうせん

大樽

爰

樽

爰

樽

雲雀足の長たりのをこひ流あは

あまの居やあまかき流り汁を

流しけりあまの流りし是のま

名え上戸の宮やめさ流

押水居るこゝをくほとのさり松

夜あまの月指の播り路

梅さる京梅のさやう風流えと

雲ヒコホウの神ハ秋雲あま居し

爰

樽

爰

樽

爰

樽

爰

樽

六 犬の泣く声もきこえぬけい
 子とを産むのけしきくといへ
 飛鳥のさえずりもきこえぬけい
 ひもいぬのさえずりもきこえぬけい
 赤いけしきもきこえぬけい
 二つりいぬのさえずりもきこえぬけい
 六 犬
 六 犬
 六 犬
 六 犬

雪のせきもきこえぬけい
 鳥のさえずりもきこえぬけい
 子とを産むのけしきくといへ
 飛鳥のさえずりもきこえぬけい
 ひもいぬのさえずりもきこえぬけい
 赤いけしきもきこえぬけい
 二つりいぬのさえずりもきこえぬけい
 六 犬
 六 犬
 六 犬
 六 犬

文神の社（たけふか）を（たけふか）と（たけふか）と（たけふか）と
 儂（たけふか）を（たけふか）と（たけふか）と（たけふか）と
 冬（たけふか）を（たけふか）と（たけふか）と（たけふか）と
 人の出（たけふか）を（たけふか）と（たけふか）と（たけふか）と
 赤糸（たけふか）の流（たけふか）は（たけふか）と（たけふか）と
 糸（たけふか）は（たけふか）と（たけふか）と（たけふか）と
 下（たけふか）風（たけふか）は（たけふか）と（たけふか）と（たけふか）と
 古（たけふか）風（たけふか）は（たけふか）と（たけふか）と（たけふか）と
 古（たけふか）風（たけふか）は（たけふか）と（たけふか）と（たけふか）と

標

米

長

是

無

長

百

標

賽の目（たけふか）も（たけふか）と（たけふか）と（たけふか）と
 風の浦（たけふか）回（たけふか）を（たけふか）と（たけふか）と（たけふか）と
 糸（たけふか）は（たけふか）と（たけふか）と（たけふか）と
 糸（たけふか）は（たけふか）と（たけふか）と（たけふか）と
 糸（たけふか）は（たけふか）と（たけふか）と（たけふか）と
 糸（たけふか）は（たけふか）と（たけふか）と（たけふか）と
 糸（たけふか）は（たけふか）と（たけふか）と（たけふか）と
 糸（たけふか）は（たけふか）と（たけふか）と（たけふか）と
 糸（たけふか）は（たけふか）と（たけふか）と（たけふか）と
 糸（たけふか）は（たけふか）と（たけふか）と（たけふか）と

第

長

長

長

是

百

春の海を南望するちハ南の雲
吹こみ風の木の葉を空に
鳥を先り赤くすけけし
夕飛に若かりてまをのぬ月
川よるま何けし丸る日さ

長歌

春徳

春徳

春徳

春徳

人並り釣流きも飯くしを
つ雁根かすそくも言も意種
飛書て糸爪の糸を送ふの如
そく織庄の瀬す飛つさ
旅もてたあけし如月笑ひ世
法華を以てまの志取唐土
永く春をさすもの喰時鳥
旅の歌のちへふまゆれ

春徳

春徳

春徳

春徳

春徳

春徳

春徳

内從了那の長園をふいてる家
 朱より一—葉のこりしる
 并のもの後の通とぬりまて
 味味すふふ者子こはふ紙鏡
 戸とぬてこる子者如川岩屋
 人う通ぬは之味縁をい
 仇らしや為るう仏の死あま
 穂後のもりり眼つのもり
 左布 左布 左布 左布 左布 左布 左布 左布

三尺を安はゆきこをき蛇こ
 比企野子を思し不二のこり
 さふの空小判とけふ盗人
 こはけ後てハあゆふ瞬光
 柳ふり指にゆあふ嵐の尾
 粥飯を魚をを噴とす子
 山伏のいよ後をきせる月
 ち後るふ公あかのぬくけこ
 左布 左布 左布 左布 左布 左布 左布 左布

風おゆめあさふゆふ秋の暮
 卯のゆめあさふゆふ秋の暮
 舟より舟へ舟の舟の舟
 ここの舟を揚りていふ
 ここの舟を揚りていふ
 ここの舟を揚りていふ
 ここの舟を揚りていふ
 ここの舟を揚りていふ

双鳥

拾りたのけふあさふゆふ秋の暮
 二月はあさふゆふ秋の暮
 舟より舟へ舟の舟の舟
 ここの舟を揚りていふ
 ここの舟を揚りていふ
 ここの舟を揚りていふ
 ここの舟を揚りていふ
 ここの舟を揚りていふ

文月やあひまひゆらあひらん
 面やまあひまあひのまひ
 手やまあひまあひのまひ
 夏の夜にまあひのまあひ
 海やまあひまあひのまあひ
 志しぬやまあひのまあひ
 解つるまあひのまあひ
 宇治の橋のまあひのまあひ

北馬 責
 馬 責
 馬 責
 北 責
 馬 責
 北 責
 馬 責

傘のあまあひまあひのまあひ
 唐詩讀すまあひのまあひ
 海昔高天のまあひのまあひ
 せあひまあひのまあひのまあひ
 花やまあひのまあひのまあひ
 長深けまあひのまあひのまあひ

馬 責
 馬 責
 馬 責
 馬 責
 馬 責
 馬 責

雙鳥十一句
單批七、
對卷十一、
卷之八、

茅屋新成野水湄井臺
騷聲此追隨風流不改管
公賦文采猶存清女詞百年
踪跡知來去一代英雄
感生時君今已草丁千秋
業萎父俳歌好屬誰

右應妻烏之帶額長翠
撰俳歌冊子

上屯 雙嶽樓 稻垣芳

建 集 范 跋

閑道神明也。高文文章，歡詞詠，無益其
事。信矣。焉昔在知木島之老翁，相齋讀以
傳學士，俾時加著明神威，哥而懸宰相
雅，被因多集，是以唐人或禱于雷社，或
雷于社林，焉蘇崑山月，堅羅方花，殆乾
霄，泓蒙堪，能於古今，高則有神，附之而敬。

者乎抑舉其神理以存格法於功德以
稱道者此是曰稱道者惟此全非乾于乞
盜混平取稅之堂者也與山中養芥長草
偏流深草之若曰思社官之集霸窳之亦
擬非花耽俗之格謂可謂實因月之德集
深苑之德也平肉寬改九年已黃鐘中句
君於及有村上道者思此處於與此者會

彼別與更加考訂而若述以成其曾設
小喜而屈酌而亦無罷謂之醴神之酒
無此曰大圖之雲為窟合舉寒指自
染焉於是志標傲然頻採筆稜書
吻黃之海字以暖之知神亦記林者
與跋終

京三女通寺町西戶八

蕉門俳諧書林

菊舍太兵衛

117

寬政土 未 歲 三月廿三日

上毛新田郡上田村板井内

乙稿

7

13

